《研究ノート》　立正安国論に学ぶ

災難興起の根源を截る

〈第五問答〉

研究所員　高橋謙祐

前の問答では、謗法の人は、捨閉閣抛の「四字を以て、多く一切を迷はし、剰へ三國の聖僧、十方の仏弟を以て、皆、群賊と号し、併せて罵詈せしめた」法然であることを明かしたのであるが、第五問答は、眼前に起こっている災難の原因はまさに浄土念仏義、特に法然の捨閉閣抛という私曲の説、法然その人にあることを示すのである。法然こそ災難興起の源であるという災難の禍根を具体的に史実を以て明かそうとした、『安国論』の中でも謗法の源を明確にし、破国土の根源を問うたところである。この問答は、「万祈を修せんは、此の一凶（法然の念仏）を禁ぜんには如かず」〈第四問答〉という念仏の行を禁ずる主人の主張に対して、ことさら血相を変えた客が曇鸞法師・道綽禅師・善導・恵心僧都らの念仏行を弁護する言葉ではじまっている。

ここで客は、浄土念仏の流布した事実を以てその正当性を主張しようとする。釈迦如来が浄土三部経を説いて以来、曇鸞は中論・百論・十二門論などの説を捨てて浄土の往生思想に帰依し、道綽は『涅槃経』の研鑽をやめて西方極楽浄土の行を弘め、善導は雑行をなげすてて往生の正因たる五正行をうちたて、そして日本では恵心僧都が『往生要集』を

著わし、浄土念仏の一行を根本的な教えとした。多くの人々が阿弥陀仏を尊崇し、往生をとげたのは、こうした浄土念仏流布の事実をもって知るべきである。この念仏流布の歴史的な事実をあげているのが客論の浄土念仏を弁護する一つの立場である。これは、いままさに広く弘まっている現実の事実を以て浄土念仏が真実であることをいおうとしている。

その中でも、先師の諸説を思慮し、ついに諸経を抛って専ら念仏を修するに到達し、人々からは勢至菩薩と号され、あるいは善導の再誕かと仰がれた法然は、貴賤を問わず多くの人達から尊ばれ、法然亡き後10年たってもいまなお阿弥陀念仏に帰依する勢いは衰えていない。これは先師はじめ法然の学徳・人徳の篤いことによるところであった。ちなみに、法然は一二一二年に入滅、日蓮聖人の『安国論』執筆が一二六〇年、その間約50年の歳月が流れている。これら念仏流布の事実に加えて、客の言い分はこうである。このように広く信じられているのに、どうして近年の災難続発の原因が約50年も前の後鳥羽院の御宇、法然に帰せられ、ひいては先師（曇鸞・道綽・善導）に求められ、災難が法然浄土教によるのか、それはあまりに暴論でないか、と。

そこで、退座しようとする客に主人は、事の起りを談じはじめる。「釈尊説法の内、一代五時の間、先後を立てて権実を弁ず」、これが一代仏教をわきまえる主人の基本的な立場である。その権実をわきまえず、「既に権（教）に就いて実（教）を忘れ、先に依って後を捨つ」曇鸞・道綽・善導の謬りを指摘し、これらはいまだ仏教の根本をさぐっているものではない。彼らは、法華経の真実教を忘れ、浄土三部経の権教をとり、聖道浄土二門、難行易行二道、正雑二行をわけて、弥陀念仏の一行をたてた。この流れをくむ法然もまた仏教の淵源を知らないものである。というのは、法然は『選択集』を著わし、「夫れ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、且く聖道門を開いて、選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば、正・雑二行の中に、且く諸の雑行を抛って、選んで応に正行に帰すべしと」とて、捨閉閣抛の四字を以て、あらゆる大乗経と一切の諸仏菩薩や諸天善神を、捨てよ、閉じよ、閣け、抛ち、すべては浄土念仏の正行に帰す

べきことを説いたが、この捨閉閣抛の四字こそ法然が曇鸞・道綽・善導の仏教の淵源をわきまえない誤謬の説から導き出し、さらに法然自身の私曲の説だからである。だから「全く仏経の説を見ず」と主人は攻撃したのである。権実をわきまえないこと、それは仏説によらないことによる結果であると、あくまで仏説による権実の判断が問われたのである。法然の独自な判断、つまり捨閉閣抛という自己の独善的な解釈判断を以て、一代仏教を判じ、念仏を一行を除いて他経を権教の中に摂めてしまう、かくしてしまう、諸経を忘れさせてしまう、そうした念仏の教えは、仏の説くところではなく、曇鸞・道綽・善導ら権実をわきまえない先師の流れを酌む法然の私曲勝手な解釈である。仏説によらず、そうした私曲の説によることは「謗者を指して聖人と謂む、正師を疑って悪侶に擬す」現象を生む根本的な原因になるとした。諸経・諸仏を捨閉閣抛してしまうものこそ『選択集』であり、それを世に著わし弘めた法然こそ世の人々を惑わし、事の起こる根源である。その法然の教えは、遠く曇鸞・道綽・善導からの流れのうえにあるので、いま念仏のあやまちは法然に、さらには彼の先師にまでさかのぼらねばならないというのである。さしずめ、念仏思想を集大成したのが法然の『選択集』であるなら、弥陀一仏を仰いで諸経諸仏を忘れさせてしまう直接の原因となるところは法然その人ということになる。仏説によらない教え、たとえそれが高僧の説であろうと、それはかえって法を謗しることであり、ましてや私曲の説を以て真実教・正行とすることはまさしく法（仏教）を謗しるものであって、正行でない邪な法を以てしては災難の興起することは、『金光明経』や『大集経』の説くところであった。主人は、法然が曇鸞・道綽・善導の念仏義より「之に准じて之を思」ってたてた私曲の詞（ことば）、捨閉閣抛の教えに根本的な過ちをみつけ、ここに世人を惑わす一凶、謗法の根源と判断した。日蓮聖人は「之に准じて之を思ふ」（准之思之）という四字こそ法然の誤れる、法を謗しる根源であると、すでに『守護国家論』（定遺一〇七頁）で強調している。

世の乱れるのは災い到来の前兆であるとは、護国経典の一つとして崇められてきた『金光明経』などによく説かれる

ところである。ここで主人は、「衆経を抛ち、極楽の一仏を仰いで、諸仏を忘る。誠に是れ諸仏・諸経の怨敵、聖僧・衆人の讎敵也」という実教・実仏を忘れた世人の乱れは、災難到来の徴として中国の先例をあげて諭す。

そこでまず、中国の『史記』を引用した『摩訶止観』や『止観弘決』から、その『史記』にあるごとく、周という国が滅んだこと、滅ぶ前兆がその百年もの前からすでにあらわれていたことを言い聞かせて、まず前兆があらわれて、災いはその後に来ることを知らしめている。これは、きざしを知り、災難へ至る根源をみきわめることを主人は暗黙のうちに示している。さらに主人は、浄土念仏が災難を起こす前兆ということを史実を以て説き明かすのである。すなわち、慈覚大師円仁の『入唐巡礼行記』には、「唐の武宗皇帝の会昌元年、勅して章敬寺の鐘霜法師をして、諸寺において阿弥陀念仏の教えを伝えしめ、寺ごとに三日間、順々に絶えず巡らしめたが、同二年、回鶻国の軍兵ら、唐の国境を侵す。同三年、河北の方面軍司令官俄かに乱を起こす。その後、大蕃国また唐政府の命を拒み、回骨国重ねて土地を侵す。兵乱の状態は、おおよそ秦末の項羽の時代に同じく、災火は村に町に起こる。ましてや武宗は大いに仏法を破却し、多くの寺院を滅ぼし、世の乱れを治め得ずしてついに自滅した」(趣意)とあって、こほ先例こそ、弥陀信仰によって国土が滅した事実としてあげた。ここでは災難到来の前兆を示しているのであるが、やはり史実をもって災難の禍根を明かしている。こうした実例を示した上で、私曲の法然の念仏が世を乱していることこそ災難の前兆であって、「何ぞ近年の災を以て、聖代の時に課せ、強ひて先師を殷り、更に聖人を罵るや」という客に答えたことになる。そして主人は、第四問答の「彼の万祈を修せんは、此の一凶を禁ぜんには如かず」という主張から、さらに「唯須く凶を捨てて善に帰し、源を塞いで根を截るべし」という謗法禁断を強調した。

この第五問答に至ってはじめて、法然浄土教が近年より近日に至る災難の根本的原因であることを中国の先例を以て具体的に説き明かした。したがって災難からのがれる一つの手立ては、そのよってたつ源をきわめ、その根をたちきる

ことが提言されたのである。この「根を截るべし」という結語は、第九問答の「速かに実乗の一善に帰せよ」へと続く文であるが、まず、災難のよって起こる源をきわめ、どのようなことが根本的な原因としてあるかを知り、その因をたちきることが根本的な問題として問われているように思われる。何ごとにおいても悪の根源をきわめ、その根をたちきることの、「日蓮が一門」への要請は、日蓮聖人以来、その教えの基本姿勢として今日なお大きな警鐘として我々に求められていることである。客の意見をくみつつ、「須く凶を捨てて善に帰し、源を塞いで根を截るべし」という主人のことばがとりもなおさず、日蓮聖人の警鐘であり、第五問答の主眼であることは言うまでもない。